

---

neral Unilateral Neuro-link Dispersive Autonomic Maneuver ~

dragoons

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス } General Uni  
lateral Neuro-link Dispersive  
Autonomic Maneuver }

### 【Nコード】

N8441Q

### 【作者名】

dragoons

### 【あらすじ】

お前の世界でも女って強いよな？  
でも俺の世界では間違いなく「最強」の存在だぜ。  
だからこそ、な。  
ちよつとは、男もカッコイイ所見せなきゃいけないだろ？

この世界はどこまでも女が強くて・・・

男尊女卑。

何世代前の言葉だろう？

男女平等。

残念ながら一世代前の言葉だ。

女尊男卑。

これが今の世界の現実だ。

確かに男尊女卑の時代があったのだから、女尊男卑の時代があってもおかしくはないと思う。  
だけど、

（コレはないだろう。）

とある少年、神風生かみかぜいくはある場面に遭遇している。

道端でばったり会った女性にすぐそばにあるクレープ屋でクレープ

ちなみにお願ひではない。命令だ。

そして、神風はその命令を即答で拒否した。

結果、

「ハア！？なに、アンタなめてんの？警備員呼ぶわよ。」

その後、神風は（心の中で）10コぐらいツツコミの嵐を決めるわけだが。

（さて、どうしたもんかね？）

そして、今へとつながる。

なんか、周りにも野次馬が集まり始めている。

（逃げるかな・・・。）

と、考えていた所で、

唐突に右腕をガシツと掴まれる。

「すみません。この人は私の友達で。」

右の方を見ると知らない女の子がいた。

フロント  
金髪の女の子だ。

多分、年齢は自分と同じくらいだろう。

服装はタンクトップにショートパンツ。顔だちも整っていて可愛いという印象を神風は持った。

そんな事を考えている内に、その女の子が神風の腕を掴んだまま走り出した。

神風の背後では、先程の理不尽女が何か言っているが、神風の意識はもうそちらにはない。

（えーっと、・・・）

なんだか、良い一日になりそうな気がした神風だった。

しばらく走って公園まで来た。

（こんなに可愛い女の子と知り合いになれるなんて俺はツイてる。

ってことで、まずは心の中でガッツポーズ！そして、とりあえず、

「ありがとな。」

その言葉を聞いた女の子はキョトン？としている。

「さっき。助けてくれたんだろ？だからさ。」

「あつ。別に、いいよ。そんなことぐらい。」

「そっか？うーん、だけど、このまま何も礼をしないってのもなあ。」

「

「イヤ、ホントにいいよ。」

「だめだ。それだと俺の気が済まない。そうだなあ。」

と、そこで神風はあるものを見つけた。

「クレープぐらいおごらせてくれよ。」

でも優しくて・・・

「いや、なんかごめんね。」

と、神風は言って例の女の子と共にベンチに座る。

「ば、僕は別に、全然・・・。」

その女の子はといたら、クレープを食べながら顔を赤くして俯いている。

実は、さっきクレープを買った時、・・・

「すみません。クレープを二つください。」

「かしこまりました。お味は何に致しますか？」

「ストロベリーとブルーベリーで。」

「あつ！カップルさんですか・・・？」

「え！？いえ・・・。ちが・・・。」

「オマケ、しときますね。」

「・・・。。。。。。。」

名前も知らない奴とカップル呼ばわりされれば、それは恥ずかしいだろう。

（名前といえば、まだ名前知らなかったな。）

「そつえばさ。」

と神風が声をかけると女の子がビクウ！と飛び上がった。

「名前、なんていうの？」

「えっ！？な、名前？」

「うん。そ、名前。」

「あ、う・・・それは、えつと・・・。」

「あ！そうか。こういうのは自分から名乗るべきか。ごめんね。俺の名前は神風生。よろしくね。」

神風は言つて、ニツと笑う。

女の子のほうも慣れてきたのか大分話せるようになった。

「僕の名前はシャルロット・デュノア。よろしくね。」

「うん。よろしく。デュノアさん・・・でいいかな？」

「シャルロットでいいよ。そっちも生でいいかな？」そこで、シャルロットが微笑んだその顔を見ていた神風はなんだかドギマギしてしまった。

（ハア。可愛いって罪だよなあ）

そんな事を思っている神風の容姿はまだ内緒。

クレープを食べ終わってしまい、シャルロットをいつまでも引き留めておくのも悪いので、そろそろ別れる事にした。

「それじゃあ、俺はコレで。」

「あつ！？うん。クレープご馳走様。」

「いやいや。昼間っから可愛い女の子に会えたんだから、安いもんさ。」

「か、可愛い・・・、って・・・。」

カアッと顔を赤くするシャルロット。

「本当に、今日はありがとね。それじゃあ。」

そんな出会いが昨日あったとき。

なんか珍しくて・・・

時は7月1日、月曜日、午前8時30分。

場所は、天下のIS学園。

ISというのは、通称だ。本当の名前はインフィニット・ストラトス。これは、日本にいるハズのとある一人の天才によって開発された次世代型パワードスーツである。そして、この場所はソレの操縦者育成施設だ。

元来、人類が宇宙へと進出するために開発されたはずなのだが、どこからどういう様に曲がったのか今はスポーツなどの競技として使用されることが多くなっている。

しかし、それはあくまでも表の顔だ。そして肝心の裏の顔とは？

兵器。ISはそれまでの兵器を火力、汎用性、装甲というどの面においても凌駕した存在だった。

そして何より重視すべきなのは、その機動性だ。戦闘機よりも速く、ミサイルよりも急加速をでき、ヘリよりも小回りのきく機体。それがISだった。

それと、もう一つ。

ISは女性にしか扱うことが出来ない。

そのため、今は女尊男卑という世界が実態である。

少し分かりやすく言おう。

男の力では女に勝てない。男が強かった時代は終わった。そういうことだ。

そういえば、言い忘れていた事が一つあった。というか、言い間違えていた。

ISは女性にしか扱う事が出来なかった。

今は男性からのささやかな反撃が始まっている。

ISを動かせる男子が登場したのだ。世界で最初にISを動かした男性、織斑一夏。

彼もこのIS学園に入学している。

そのためこの学園では男子「1」に対して、大勢の女子という妙な構図が成り立っているわけだが、・・・

今日からは男子が「2」となる。

ここは、IS学園の一年一組。実はこの一年一組、色々な秘密があるのだがそれはまた別の話。

とにかく、今はSHRの時間だ。ざわめく教室には色々な噂が流れているが多すぎて、読者の皆様にお伝え出来ません。つか、女子の噂なんてアテンならんだろう？

今、この教室の教卓の前にはこのクラスの副担任である山田真耶が立っている。

身長は低いが要所要所はキッチンと実っており、眼鏡が似合う優しい感じの先生だ。

いつも通り、ただの消化作業のようにパツパと進行していくSHR。しかし、最後に一つだけいつも通りではない事柄が待っていた。といっても、この一年一組の生徒である者たちにはある程度慣れ親しんだことなのだが。

「えーと、最後にみなさんに発表があります。」

スーッ、と滑らかにドアが開く。

そして、その人物は教室へと入ってきた。

まず、最初に見えたのは足。そして、その足はズボンを履いていた。ちなみにこの学園の女子は全員スカートを履いている。

「えっ!？」とクラスの誰かが驚愕の声を上げた。

次に見えたのは手。キメの細かい綺麗な肌をしていた。しかし、ある程度の太さとゴツさをもっており華奢なイメージを見る者に抱かせない。

「嘘・・・。」と、これまたクラスのだれかが呟いた。



最後にその人物の全貌が明らかになる。ツンツンとしたオレンジ色の髪が特徴的だが、女子の目をなによりも引くのはその顔。

「びしょーねん。」またまたクラスのだれかの口からそんな言葉が零れ落ちた。

そう。

美少年、美少年、美少年。（銀河美少年ではない）

そして中央まで歩いていった少年はクラスメイトの方を向いて言った。

「今日から、このIS学園に編入することになりました。かみかぜいく神風生です。これからよろしく！」

沈黙する四半秒。そして・・・

「ええーっ!!」

「どうしました？デユノアさん・・・？」

ガタンツと音を立てて立ち上がる少女が一人。

「あれ？シャルロットじゃん。」

「い、生・・・？」

そこで周囲の女子がザワザワとし始める。

「とりあえず座って頂けますか・・・？」

クラスの騒ぎが大きくなる前に山田先生が鎮めた。

「神風君、その空いている席に座ってください。えー、それではSHRを終わります。」

かくして、世界でISを動かせる男は二人になった。

いろいろ大変で・・・

いつもに増して騒がしいここはIS学園の一年一組。

何故、いつもよりもうるさいのか？

理由は簡単だ。今日、このIS学園に二人の男子が入学した。

しかも、ソイツが美少年だったらなおさらだ。

「キヤー！美少年よ！美少年！」

「カワイイとこもイイケド、なによりカツコイイ！」

「織斑君とのツーショットもステキ・・・。」

と、周りの女子達がキヤイキヤイと騒いでいる。

一方、当の本人たちは・・・

「お前は『男』だよな？」

「質問の意味をはかりかねるが・・・。」

と、なんだか奇妙な、しかし当人たちにとってはいたって真剣なやりとりが行われていた。

ちなみに、質問をしているのが一夏、その突飛な質問を受けてあからさまに狼狽しているのが神風である。

「実はコルセットを胸に着けた女子でした。なんていうオチじゃないよな？」

ズズイ……。と片方がもう片方へと詰め寄っている。

詰め寄っている方の男子、織斑一夏は昔一人の「女子」にだまされている。

二人目のISを動かせる男子として入学してきたシャルロット・デュノア（当時はシャルル・デュノアと名乗っていた。）は、実は女子だったのだ。

男が自分以外にもいると知り期待が大きかった分、はずれた時の焦りはかなりあったらしい。

そんな複雑な心境が一夏にこういった行動をとらせているわけなのだが、

無論、神風はそんなことを知る由も無い。  
で、

「えーっと、お前はあれか。最近、巷で有名な『変態』か？」

「ち、違っわっ！」

「んじゃ、なんなんだよ、さっきの質問！？あんなの変態以外の何者でもないだろ！？」

にべもない。

一夏はそのまま地面に埋まりこみそうな勢いで沈んでいった。

「ハハハッ！いやまあ、冗談だって。色々なんか事情があんのは分かったからさ。」

と、快活に笑っているのは神風だ。

「冗談だってわかって安心してたけど、本当に変態なのかと思われたと思っただぜ・・・？」

「スマン、スマン。ま、改めて・・・神風生だ。よろしくな！」

「こちらこそ。俺は織斑一夏だ。」

一夏と自然に会話している姿を見て安心した女子達が、早速神風へと話しかけに行く。

「神風君の髪って染めたの？」

「ん？ちがう、ちがう。コレ、生まれつきなんだよ。」

確かにオレンジ色の髪は珍しいだろう。

「それとさあー、神風くんって専用機持ってるのー？」

「バカだなー、ノンは。そんな専用機なんてみんながみんな持つてるわけ・・・」

「持つてるよ。」

それまで騒がしかった教室が一気に静まり返った。

しかし、それは嵐が過ぎ去った後ではなく、過ぎ去る前の静けさだった。

そして、それは神風が「ア、アレ？」と首をかしげた瞬間に爆発した。

「「「見せてっ！！！」」」

このクラスのチームワークは中々のものだろうと推測させる程の大会  
合唱だった。

「え、んーんと・・・。」

顎に手をあてて考えていた神風はこんな提案をした。

「んじゃ、今度の実技訓練で。」

一年一組の授業予定では、次の実技訓練は・・・

「・・・って、今からじゃん。」

なんだか始まって・・・

「それでは、実践訓練を始める。」

キビキビとした声でそう言ったのは、生達いくのクラスである一年一組の担任、織斑千冬だ。

ここはIS学園の第3アリーナ。

今はIS同士のバトルが出来るように観覧席の前にはシールドが張られている。

「早速だが、今すぐ実践訓練のほうに入ってもらおう。最初は、織斑と神風だ。」

IS同士のバトルでは、基本的にシールドエネルギーの削り合いとなる。

ISには、元々持っているエネルギーがあり、攻撃が当たったり、特殊な能力を使う事によって減っていく。このエネルギーがゼロになれば負けだ。

「それじゃ、お手柔らかに頼むぜ。一夏。」

「ああ、そっちもな。来い『白式』！」

一夏が右腕の白いガントレットに左手を当て叫んだ直後、その体が眩い光に包まれた。

そして、その一瞬後にはその全貌が見えていた。

一夏専用のIS「白式」は、その名前からもわかる通り純白の装甲を持った機体だ。

背部には一对の翼のようなスラスタが備え付けられており、細部には様々なデザインが施されている。

「へえっ！やっぱ、スゲエな！んじゃ、俺も・・・。」

生はスッ、と目を閉じその名前を告げた。

「『ガンダム』、行くぜっ！」

生のベルトのバックルが光り出し、その光が生の全身を包み込む。

「ナニ、アレ・・・？」

生のISが見えた。

しかし、それはあまりにもISらしくなかった。スツキリとしたライン。しかし、そのラインを持った装甲は肘から指先にかけての腕部と膝から下の脚部にしか展開されていない。後は、背部にある小さな2基のスラスターの為の機械的な装甲があるだけ。

大半のISには胴体の部分に装甲は無いが、神風のISである「ガンドム」にはあまりにもその装甲が少な過ぎた。

「ま、シンプルイズベストってやつだ・・・。」

と、生は不敵に笑う。

生と一夏は上空へと飛翔していく。

その時、違う場所で、

「専用機持ちは準備しておけ。」

と、千冬から声を掛けられた4人の少女達がいた。

「それじゃ、そろそろ始めるぞ。」

一夏が生へと声を掛けた。

「ああ。」

と、生も言葉を返す。

二人の間に緊迫した雰囲気の流れ、唐突に戦いが始まった。

先に仕掛けたのは一夏だ。

スラスターを吹かせながら、相手の虚をつくように生に突進する。

そして、その手に生み出した「白式」の近接武器「雪片式型」を横に薙いだ。

それを生は、上半身を仰け反らせることでかわし、そのまま後ろに回転して一夏の顎を蹴り上げる。

一夏もギリギリ気付いたようで、刀を持っていない方の腕でそれを防いだ。

すかさず距離を取る生。その右手には既に「ガンダム」の中距離武装である「ビームライフル」が握られている。

「はやっ!?!」

と一夏が叫ぶと同時にビームライフルが連続して放たれた。

一発目と二発目はかわすが、流石に三発目はかわしきれなかったよ  
うで「白式」の左足にあるスラスタが潰される。

「くっそ!めちゃくちゃ強えじゃねえか!」

一夏は叫んで瞬間加速し、イグニッション・ブーストタイミングを合わせて生に刀を振り下ろし、一撃離脱する。

しかし、生はそれを実体剣の「ガーベラ・ストレート」でいなしていた。

だれが見てもどちらの実力が上かは明らかだ。

篠ノ之箒は、ちのほのはるとある衝動に駆られていた。

自分も戦いたい、という。

そんな箒の心を見透かしてか、千冬は声をかけた。

「篠ノ之、行ってこい。」

「・・・!?!し、しかし・・・。」

「いいから。はやく行ってこい。」

「・・・ハイッ!!--」

嬉々として返事をした箒は自分の目的を果たす為、空へと舞い上がった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8441q/>

---

IS インフィニット・ストラトス ~ General Unilateral Neuro-link Dispersive

2011年3月28日20時21分発行